

一古疊三百五拾文

〔源氏物語須磨^{十二}〕御ともにまいるべき心まうけして、わたくしの別おしむほどにや、人めもなし、さらぬ人はとぶらひまいるをもきとがめあり、わづらはしきことまされば、所せくつどひし馬車のかたもなくさびしきに、世はうき物なりけりとおぼししらる、だいたんなどもかたへはちりばみて、たゝみ所々ひきかへしたり、みるほどだにかゝり、ましていかにあれゆかんとおぼす、〔枕草子^二〕七月ばかりいみじくあつければ、よろづの所あけながら、夜もあかすに、月のころはねおきて見いだすもいとおかし、やみも又おかし、有明はたいふもをろかなり、いとつや、かなるいたのはしちかう、あざやかなるたゝみひとひらかり、そめにうちしきて、三尺のきちやうおくの方にをしやりたるぞあぢきなき、

〔今物語〕或殿上人さるべき所へ参りたりけるに、おりしも雪降て月おぼろなりけるに、中門のいたにさぶらひて、寢殿なる女房にあひしらひけるが、此おぼろ月はいかゞし候べきといひたりければ、女房返事はなくて、とりあへずうちより、たゝみををしいだしたりける、心ばやさいみじかりけり、

新古 照もせず曇もはてぬ春のよの朧月夜にしくものぞなき

○按ズルニ、新古今和歌集ニハ、文集嘉陵春夜詩、不明不暗朧々月といへることをよみ侍ける、大江千里下アリテ、此歌ヲ載セタリ、

〔富樫記〕政親宣、強不可作罪、怖來世之報、去來^{イサヤ}面々腹ヲ切ト宣フ、去バ承候ト、疊五六十帖擲出シ、廣庭ニ敷並々々居、既ニ欲切腹、

〔駿河土産^二〕駿府御城内に而若き御番衆寄合、相撲取居候所、江權現様被爲成上意之事、權現様、駿府に御座被遊候節、御城内にて若き御番衆寄合、座敷相撲を取居被申候處へ、不圖被爲